

非専門家が本書を利用する場合には一応の注意を要する。本書の索引は詳細に作られているが、本書の複雑な叙述に鑑み、年表を附けることが望ましかつた。附図は簡単なスケッチ風のもので、あまり役立たない。

(Mohammad Anwar Khan: England, Russia and Central Asia (A study in diplomacy) 1857-1878. Peshawar 1963. Published by University Book Agency.)

トルコ言語協会編

「言語における『純粹化』^(註)の限界」

護 雅 夫

トルコ言語協会は、言語問題に関する種々の公開討論会 (agik oturum) を計画しているが、一九六二年五月一九日、イスタンブール大学文学部で、その第一回討論会が、「言語における『純粹化』の限界は何処に置かるべきか」のテーマのもとに開かれた。本書は、この討論会の速記録を主にし、これに、その直後、種々の雑誌・新聞にあらわれたこれに関する意見をつけ加えたものである。

批評と紹介 護

討論会は、トルコ言語協会会長タフスィン・バングオウル (Tahsin Banguoğlu、トルコ語学者) の開会の辞にはじまり、イルハミ・シユヴァオウル (İlhami Cıvdoğan) の司会のもとに、アガン・スッル・レヴァン (Ağah Şirri Levend、トルコ語学者、トルコ文学史家)、オメル・アスム・アクンイ (Ömer Asım Aksoy、トルコ語学者)、ムハレム・エルギン (Muharrem Ergin、トルコ語学者)、コメル・エルトプ (Konur Ertop、トルコ語学者)、アズィズ・ネズィン (Aziz Nesin、作家、とくに諷刺作家)、アスム・ヘズィルシ (Asım Bezirici)、ビクメト・ディズダルオウル (Hikmet Dizdaroglu、トルコ語学者、トルコ文学史家)、ジャヴィト・オルハン・テュテンギル (Cavit Orhan Tütengil、トルコ文学史家)、イスメト・スングルバイ (İsmet Sungurbay、法律学者) が、それぞれ一〇分間づつ報告し、三時間にわたつて、熱心な討論が行なわれたという。つぎに、「言語の『純粹化』」の問題に対する、多少とも具体的な提案と思われるものだけを紹介する。

アクソイ(トルコ語学者)。トルコ語の「純粹化」の限界―規準は、つぎのように考えられる。(1) 一世紀にオウズ・チュルク族がアナトリアに移住するさいもたらしたと思われるアラビア・ペルシア語起源の語には手を触れぬ。(2) 民衆語として完全にトルコ語化してしまっている語の「純粹化」は、

これを急ぐ必要はない。(3)さしあたりの問題は術語で、これは、二種類に分れる。(a)普通教育(小・中・高)に用いられる術語は、これを全部トルコ語に変えなければならぬ。(b)大学教育で使われる術語については、その「純粋化」を急ぐ必要はない。しかし、これらを、永久に外来語のままに残しておく、というのではない。ただ、今日まだ、その用意ができていないのである。例えば、六〇年前に編纂されたトルコ語辞典(Semsetin Sami: Kanun-ı-Turki)に採録されたトルコ語のうち、トルコ語は四三パーセント、アラビア語は三八パーセント、ペルシア語は一五パーセント、ヨーロッパ語は四パーセントである。これにたいして、一九五九年にトルコ言語協会が出したトルコ語辞典(Mehmet Ali Ağakay: Turke Sözlük)では、トルコ語は五八パーセントに増えているが、ヨーロッパ語も一五パーセントに増加し、アラビア語、ペルシア語は、それぞれ、二三パーセント、四パーセントに減りつつも、依然残存している。つまり、六〇年間の、とくに、「言語革命」以後の努力にも拘わらず、それに対応する固有トルコ語を見出せぬ外来語があるのである。これらをつまみ、トルコ語に変えるには、充分な学問的留意が必要である。

エルギン(トルコ語学者)。トルコ語の「純粋化」は、(1)範圍、(2)実施の両面から考察される。範圍についていうと、すべての語を固有トルコ語に変えてしまうのが理想である。す

なわち、その「純粋化」に限界はない。しかし、現実的には、順序がある。まず第一に「純粋化」すべきは術語であり、第二にとりあぐべきは、まだ民衆語・国民語として定着していず、ただ、書き言葉・文学用語、インテリの言葉としてだけ使われているものである。第三に、民衆語、共通語、つまり、トルコの全民衆が日常語として共通に用いている、現に生きている語がある。これを軽率に「純粋化」するのは混乱のもとである。つぎに、実施についてのべると、新しい概念をあらわす新しい単語を創る場合、学問的に、すなわちトルコ語の構造に適合した方法で、これを行なわねばならぬ。個人の恣意による創造であつてはならない。「言語革命」の初期におけるような「熱情」の時代はすでに去り、いまや「学問」の時代に入っているのである。

エルトプ(トルコ語学者)。トルコ語の「純粋化」とは、一方ではトルコ語の本来にかえすこと、他方では現代文明に対応できるものにすることであり、それには限界はない。具体的には、それは、外来語をすべて追放すること、それらに代るものとして、今日忘れられてしまった古い固有トルコ語を復活し、学問的方法によつて新語を創造すること、それを通じてトルコを「富裕化」すること、そして、トルコ語を秩序ある整然たるものとする、——これらによつて達せられる。「純粋化」は、言語自体の発展にまかせておいたのでは

なしとげられない。例えば、一九二五年二月二日附の新聞「夕方 (Akşam)」に用いられている語中、トルコ語は二六パーセント、アラビア・ペルシア語は六八パーセント、ヨーロッパ語は六パーセントを占めている。ところが、一九六二年五月一八日附の同新聞では、トルコ語が六一パーセント(このうち、復活された古い固有トルコ語が四八パーセント、新造語が二三パーセント)、ヨーロッパ語が一〇パーセントに増えたのにたいし、アラビア・ペルシア語は二九パーセントに減っている。このような「純粹化」の成果は、言語自体の發展にまかせず、外部から変革の手を加えたからこそ得られたのである。

ネスイン(作家)。言語の問題を、社会全体から切りはなしで、これだけ論ずるのはナンセンスである。限界は学者が定めるものではなく、個人々々が設定すべきものである。社会の変化・進歩につれて、新しい語は自然に生まれる。学者の仕事は、社会のうしろから進み、新しい法則を生み出してゆくことにすぎぬ。

ディズダルオウル(トルコ語学者、トルコ文学史家)。トルコ語を豊かにするには、つぎの四つの方法がある。(1)トルコ語の語根に、学問的法則にかなった方法で語尾を附することによつて、新語をつくる。(2)二つの語をつなぐ。(3)民衆の間に用いられている固有トルコ語を蒐集して使用する。(4)古

トルコ語文献に見える固有トルコ語を復活させる。現在、トルコ言語協会は、この方法を術語に適用し、その「純粹化」を進めている。

以上、討論会における報告のなかで、多少とも具体的提案と思われるものを紹介して来たが、これらさまざまの主張を持つ報告から、ほぼ共通した点と目されるものを引き出すと、つぎの如くなるであろう。

(1) トルコ語の「純粹化」には、理想としては、限界を認めべきではない。

(2) ただ、何よりもまず「純粹化」すべきは術語である。その後、順を追つて、ほかの語にもおよぼしてゆかねばならぬ。

(3) 「純粹化」は、学問的法則にのつとつて推進されるべきは当然である。しかし、その学問は「革命的情熱」によつてささえられたものでなければならぬ。

この書を一読してまず注意されるのは、わたしが平生接している歴史関係の著書・論文に比べて、新造語が非常に多いとゆうことである。一般に用いられている Hony, H.C.: A Turkish-English Dictionary や Heuser-Sevket: Türkische-Deutsches Wörterbuch にならぬ語が、各頁に数

Oturunlar Dizisi: 1), Ankara, 1962, 82s.)

語、多い場合には一〇語以上も見當る。いな、新造語を一番
 沢山収録しているはずの Mehmet Ali Ağakay: Türkçe
 Sözlük に見えぬ語さえ数多い。本討論会での報告者のすべ
 てが、トルコ語「純粹化」運動の支持者・推進者であるとす
 れば、これは至極当然で、さして怪しむに足りない。しかし
 それにしても、ここに用いられているトルコ語と、わたしが
 ほかのもので読むそれとの相異は余りに大きい。極言すれ
 ば、トルコのインテリは、「純粹化」されたトルコ語を使う
 グループと、そうでないグループとに二分されているかの如
 き感さえうける。そして、トルコの現代小説そのほかから推
 察するに、農民の言語は、後者に近い。そうだとすれば、今
 日のトルコ民族全体が、非常に異なつた言語を用いる二つの
 グループに分かれている、とさえ言つて言えなくはない。
 果してこれで良いのか？　これが、この書を読んで得た、
 わたしの率直な感じである。

(注) 原語は *özleşme*。öz は「真正の、まじりけのない、
 純粹の」を意味する。トルコ語の「純粹化」とは、トルコ
 語から外来語要素をすべて排除し、固有トルコ語にかえる
 ことを意味する。

(Türk Dil Kurumu: Dilde Özleşmenin Sınırı Ne
 Olmalıdır ? (T.D.K. Tanıtma Yayınları, Açık